

哲学と狂気の関係について、精神分裂病論の流行以来、自閉症・発達障害を対象として、再び、素朴な見方が流行しているように見えます。

それは、例えば、個人による自己の狂気経験の解釈はそのまま妥当し、そのような複数の個人の経験の記述は相互に交換可能であり、その過程に対して哲学は親和的であるといった見方です。あるいは、哲学は、狂気経験に肉薄し、狂気体験を描写し、狂気の意味を読解することができるといった見方です。

ただし、狂気の用法の違いは措くとして、二つの流行の違いはあります。前回の流行時には、超越論的な問題設定が伴っていましたが、今回の流行においては、それが掻き消えていることです。あたかも、超越論性はもはや哲学の精華ではなくなったかのように、です。

この事態について、とりあえず準 - 超越論的に捉えることはできると思いますが、しかし、その準 - 哲学も潜勢力を喪失したように思われます。その上で、哲学の行く末について少し考えたく思っています。

当日は、フッサール『間主観性の現象学』の悪名高い一節から始めて、『狂気の歴史』で弁証法的人間の息の根を止めたフーコーの立ち位置を見定めてから、ドゥルーズを念頭に置きながら、超越論性ならぬ超越性を哲学の精華として押し立てたいということを結語としようと思っています。